OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	平成三十年度　退職教員略歴・主要業績
Author(s)	
Citation	大阪大学大学院文学研究科紀要. 2019, 59, p. 273-296
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/72104
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

平成三十年度
退職教員略歴・主要業績

入江（いりえ）　幸男（ゆきお）教授　哲学講座（哲学哲学史）

榎本（えのもの）　文雄（ふみお）教授　哲学講座（インド学・仏教学）

清水（しみず）　康次（やすつぐ）教授　文学環境論講座（文学環境論）

入江幸男教授　略歴・研究業績一覧

■略歴

昭和28年８月　香川県丸亀市に生まれる
昭和47年３月　香川県立丸亀高等学校卒業
昭和47年４月　大阪大学文学部入学
昭和51年３月　同哲学哲学史第二講座卒業
昭和51年４月　大阪大学大学院文学研究科博士前期課程入学
昭和53年３月　同課程修了
昭和53年４月　大阪大学大学院文学研究科博士後期課程進学
昭和58年３月　同課程単位修得退学
昭和58年４月　大阪大学文学部助手に就任
平成３年４月　大阪樟蔭女子大学学芸学部講師に就任
平成５年４月　同助教授に昇任
平成６年４月　大阪大学大院文学部助教授に着任
平成11年４月　大阪大学助教授大学院文学研究科助教授
平成15年10月　同教授に昇任
平成31年３月　同定年退職

【客員研究員】

Passau大学（ドイツ連邦共和国）、Pittsburgh大学（アメリカ合衆国）

【非常勤講師】

日生看護専門学校、大阪工業大学、神戸市立工業高等専門学校、追手門学院大学、大阪樟蔭女子大学、岡山大学、神戸大学

【所属学会役員】

日本哲学会委員、評議員、理事、編集委員、日本フィヒテ協会会長、常任委員、日本ヘーゲル学会編集委員、関西哲学会委員、国際ボランティア学会理事、編集委員

■研究業績

【単著】

1. 『ドイツ観念論の実践哲学研究』弘文堂、2001年12月（単著、総頁数342）（博士学位論文）
2. 『分析哲学とフィヒテ哲学』平成19～21年度科学研究費補助金　基盤研究（C）研究成果報告書研究課題番号　19520021　2010年３月（単著、総頁数 92）

【編著】

1. 入江・内海・水野編『ボランティア学を学ぶ人のために』世界思想社、1999年９月発行
（担当箇所「ボランティアの思想」pp. 4-21）
2. 入江・霜田編『コミュニケーション理論の射程』ナカニシヤ出版、2000年３月発行
（担当箇所「社会問題とコミュニケーション」p.161-188）
3. 入江・長沢編『フィヒテ知識学の全容』晃洋書房、2014年12月発行
（担当箇所「第10章　「論理学」講義と「意識の事実」講義」pp. 178-194、「第Ⅳ部　〈座談会〉思想史の中のフィヒテ」pp. 271-297、「後書」）

【共著】

1. 『講座ドイツ観念論』第三巻、弘文堂、1990年９月発行
（担当箇所「フィヒテの国家契約説における二つのアポリア」pp. 123-147）
2. 『ドイツ観念論のディアレクティク』法律文化社、1990年11月発行
（担当箇所「フィヒテにおける弁証法と決断」pp. 95-115）
3. 叢書『「ドイツ観念論」との対話　第４巻　知と行為』ミネルヴァ書房、1993年12月発行
（担当箇所「ヘーゲル哲学とシステム論的家族療法についての一考察」pp. 192-213）
4. 『哲学者たちは授業中』ナカニシヤ出版、1997年５月発行
（担当箇所「ボランティアと人権概念」pp. 3-39）
5. 『ドイツ観念論を学ぶ人のために』世界思想社、2006年１月
（担当箇所「倫理」pp. 144-157）
6. 『グローバルエシックス』ミネルヴァ書房、2009年10月
（担当個所「グローバル化時代における「会話」と「議論」 ――議論の優位性をめぐって」pp. 151-176）
7. *Fichtes späte Wissenschaftslehre*、Verlag der Russische Christliche Hunaitäre Academy, ST. Peterburg, pp. 293, 2012.
(Yukio Irie, Die Möglichkeit des kollektiven Wissens bei Fichte − Kiritik des „idealistischen Individualismsus“ und das „Allgemeine Denken“ in „Die Thatsachen des Bewußtseyns“

(1810) pp. 272-282.)

8. *Kant, Fichte, and the Legacy of Transcendental Idealism*, by Halla Kim and Steve Hoeltzel (ed.),Lexington Books, Dec. 2014.
   (Yukio Irie, "Fichte and Semantic Holism' pp. 169-190)
9. *Begegnungen in Vergangenheit und Gegenwart*, Claudia Rammelt, Cornelia Schlarb, Egbert Schlarb (HG.), Lit Verlag Dr. W. Hopf Berlin, Juni, 2015.
   (Yukio Irie, 'Question and Inference', pp. 365-375.)
10. '*Transcendental Inquiry: Its History, Methods and Critiques*, ed. by H. Kim and S. Haelzel, Palgrave Macmillan、2016
    (Yukio Irie, 'Transcendental Arguments Based on Question-Answer Contradictions' pp. 233-261)

【論文】

1. 「ヘーゲルの『エレメント』概念と『精神現象学』の方法」、『哲学論叢』第 6 号、大阪大学文学部哲学哲学史第二講座発行、1980年 3 月、pp. 67-88。
2. 「方法論としての承認論」、『哲学論叢』第 8 号、1981年 3 月、pp. 71-94。
3. 「ヘーゲル『精神現象学』における無限判断とエレメント」、『大阪工業大学紀要』人文科学編第26巻第 2 号、1981年 9 月。
4. 「初期フィヒテの他者論」、『哲学論叢』第14号、1984年 3 月、pp. 73-112。
5. 「フィヒテとヘーゲルの他者論」、『哲学論叢』第15号、1985年 5 月、pp. 1-23。
6. 「『新しい方法による知識学』の他者論」、『哲学論叢』第16号、1985年12月、225-240。
7. 「問の構造について」、『待兼山論叢』第20号、大阪大学文学部発行、1987年 1 月、pp. 1-14。
8. 「フィヒテにおける自己意識の成立とダブルバインド」、『哲学論叢』第19号、1988年12月、pp. 47-70。
9. 「ヘーゲル論理学におけるアンチノミーと無限判断」、『理想』1989年冬号、理想社刊、pp. 60-69。
10. 「フィヒテにおける『世界』概念の変化」、『カンティアーナ』第21号、大阪大学文学部哲学哲学史第二講座発行、1990年12月所収、pp. 21-42。
11. 「発語内的否定と質問」、『大阪樟蔭女子大学論集』第29号、1992年 3 月pp. 201-217。
12. ‚Dialektik und Entschlu bei Fichte' in "Fichte-Studien" Bd.5, hrsg. von K. Hammacher,R.Schottky und W.H.Schrader, Editions Rodopi, 1993. pp. 93-106.
13. 「メタコミュニケーションのパラドクス（1）」、『大阪樟蔭女子大学論集』第30号、1993

年３月、pp. 179-195。
14.「メタコミュニケーションのパラドクス（２）」、『大阪樟蔭女子大学論集』第31号、1994年３月、pp. 143-160。
15.「問題の分類」、『待兼山論叢』第28号、1994年12月、pp. 1-13。
16.「問いと物語」、『哲学』第46号、日本哲学会発行、1995年10月。
17.「問答の意味論と基礎付け問題」、『大阪大学文学部紀要』第37号、1997年３月、pp. 153-190。
18.「感情の物語負荷性と問題」、文部省科学研究費共同研究報告書　課題番号07451001『感情の解釈学的研究』、1998年３月、p.151-168。
19.「ボランティアと公共性」、『ボランティア学研究』創刊号、国際ボランティア学会発行、2000年10月、pp. 37-55。
20.「現代における承認の諸相」、『ヘーゲル哲学研究』第６号、ヘーゲル研究会発行、2000年12月、pp. 28-40。
21.「問答論的矛盾」、文部省科学研究費共同研究報告書　課題番号10410004『コミュニケーションの存在論』、2001年３月、p. 207-215。
22.「ボランティア活動についての哲学研究」、『ボランティア活動研究』第11号、大阪ボランティア協会発行、2002年９月、pp. 5-12。
23. 'Models and Illocutionary Acts' in *IA'02　Proceedings of International Symposium for Young Researchers on Modeling and their Applicatons* edited by E. Tachibana, T.Furukawa, Y. Mukai and H.Ma, 2002, Oct. 21-22nd. Osaka University, pp. 1- 3
24.「発話伝達の不可避性と問答」、『大阪大学文学部紀要』第43号, pp. 1-48, 2003年３月。
25.「信念文における話し手による指示と信念者による指示」『待兼山論叢』第37号、2003年12月、pp. 35-52。
26.「NGOと公共性の問題の一事例　――ネパールのブータン難民キャンプを訪問して――」大阪大学21世紀COEプログラム、インターフェイスの人文学、文学研究科・人間科学研究・言語文化研究科、2002・2003年度報告書「臨床と対話　マネジできなもののマネジメント」2003年12月、pp. 52-59。
27.「相互知識はいかにして可能か」『アルケー』関西哲学会発行、2004年７月、pp. 54-67。
28.「三つの「なぜ」の根は一つか」『メタフュシカ』大阪大学哲学講座発行、35号別冊、2004年12月　S.59-68。
29.「グローバル化の中での社会問題と公共性」平成14年度～平成16年度科学研究費補助金・基盤研究（B）（２）研究成果報告書『哲学的概念としてのグローバリゼーションとローカリゼーション』（研究代表者：大阪大学大学教育実践センター教授・文学研究科教授

（兼任） 溝口宏平）、2005年３月25日、pp. 19–27。

30. ‚Der tranzendentale Beweis der Sittlichkeit bei Fichte‘ in *Philosophia Osaka* Nr.1, Published by Philosophy and History of Philosophy / Studies on Modern Thought and Culture Division of Studies on Cultural Forms, Graduate School of Letters, Osaka University, 2006/3, pp. 13–22.
31. 「近代理性と公共性に関する二つの問題」大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」『研究報告書2004–2006 第１巻 岐路に立つ人文学』大阪大学文学研究科、人間科学研究科、言語文化研究科、コミュニケーションデザイン・センター、2007年１月、pp. 223–235。
32. 「知を共有するとはどういうことか」『メタフュシカ』大阪大学哲学講座発行、37号、2007年３月、pp. 1–15。
33. 「観念論を徹底するとどうなるか ―フィヒテ知識学の変化の理由―」『ディルタイ研究』第18号、日本ディルタイ協会発行、2007年12月、pp. 38–54。
34. ‘What’s Going on, When We Share Knowledge?, ’in *Philosophia Osaka*, Nr. 3, Published by Philosophy and History of Philosophy / Studies on Modern Thought and Culture Division of Studies on Cultural Forms, Graduate School of Letters, Osaka University, 2008/3, pp. 37–50.
35. 「『意識の事実』(1810)における諸自我と普遍的思考」『フィヒテ研究』第16号、2008年11月、pp. 2–19。
36. ’A Proof of Collingwood’s Thesis’ in *Philosophia Osaka*, Nr. 4, Published by Philosophy and History of Philosophy / Studies on Modern Thought and Culture Division of Studies on Cultural Forms, Graduate School of Letters, Osaka University, 2009/3, pp. 69–83.
37. ‘Question–Answer Contradiction’ in *Philosophia Osaka*, Nr. 5, Published by Philosophy and History of Philosophy / Studies on Modern Thought and Culture Division of Studies on Cultural Forms, Graduate School of Letters, Osaka University, 2010/3. pp. 79–87.
38. ‚Eine Aporie der Fichteschen Wissenschaftslehre – Einige Schwierigkeiten mit der intelletuellen Anschauung‘ in *Fichte–Studien* Bd.35, hrsg. von J. Stolzenberg und O–P. Rudolph, Editions Rodopi, 2010, pp. 329–337.
39. 「内在的基礎づけ主義とドイツ観念論」、『ヘーゲル研究』16号、2010、pp. 70–81。
40. ‘Exploring the Possibility of the Unconscious Imitation of Others’ Desires’ in *Philosophia Osaka*, Nr. 6, Published by Philosophy and History of Philosophy / Studies

on Modern Thought and Culture Division of Studies on Cultural Forms, Graduate School of Letters, Osaka University, 2011/3, pp. 63–73.

41. 'Identity Sentences as Answers to Question' in *Philosophia Osaka*, Nr. 7, Published by Philosophy and History of Philosophy / Studies on Modern Thought and Culture Division of Studies on Cultural Forms, Graduate School of Letters, Osaka University, 2012/3, pp. 79–94.
42. 「意味の全体論とフィヒテの知識学」『フィヒテ研究』第20号、2012年11月、pp. 17–30。
43. 「「意識の事実」(1813) と知識学の関係――あるいは、アポステリオリな知とアプリオリな知の関係――」『フィヒテ研究』21号、2013年11月、pp. 39–53.
44. "Illocutionary Acts from the Perspective of Questions and Answers", in *Philosophia Osaka*, Nr. 10, Published by Philosophy and History of Philosophy / Studies on Modern Thought and Culture Division of Studies on Cultural Forms, Graduate School of Letters, Osaka University, 2014/3, pp. 39–48.
45. 「フィヒテのスピノザ批判」『思想』No. 1080, 2014年 4 月号、岩波書店、pp. 200–218。
46. 「問いと推論」『待兼山論叢』第48号、2014年12月、pp. 1–16。
47. "Semantic Inferentialism from the Perspective of Question and Answer", in *Philosophia Osaka*, Nr. 12, Published by Philosophy and History of Philosophy / Studies on Modern Thought and Culture Division of Studies on Cultural Forms, Graduate School of Letters, Osaka University, 2017/3, pp. 53–69.
48. "Questions and the Meaning of Identity Sentences", in *Philosophia Osaka,* No.13, Published by Philosophy and History of Philosophy / Studies on Modern Thought and Culture Division of Studies on Cultural Forms, Graduate School of Letters, Osaka University, 2018/3, pp. 21–33.

【書評】

1. 「山口祐弘著『近代知の返照　ヘーゲルの真理思想』」、『ヘーゲル学報』創刊号、創文社刊、1990年所収。
2. ,*Fichte-Studien(Fichte-Kenkyu)*, Band 1. Hrsg. von der Japanischen Fichtge-Gesellschaft' in „Fichte-Studien" Bd. 8, hrsg. von K.Hammacher,R.Schottky und W.H.Schrader, Editions Rodopi,1995. Rodopi.
3. 「思想史の方法　――山口祐弘著『意識と無限』を読んで――」、『ヘーゲル哲学研究』第 3 号、ヘーゲル研究会発行、1997年 8 月所収。
4. 「Tom Rockmore, Hege, Idealism, Analytic Philosophy, Yale Universtity Press, New

Haven and London 2005」『フィヒテ研究』第16号、pp. 123-132、2008年11月。

【解説】

1. 「パラダイム論による科学観の革命」、『現代思想のトポロジー』里見軍之編、法律文化社刊、1991年３月所収。
2. 「フィヒテ」「ヘーゲル」、『西洋哲学史②　近代篇』宗像恵、中岡成文編著、ミネルヴァ書房刊、1995年４月所収。
3. 『現代哲学の潮流』里見軍之、谷口文章編著、ミネルバ書房刊、1996年所収
   第二章「４、理性と科学の誕生――十七世紀」「５、実験と経験――十七・十八世紀」「６、理想と現実――十八・十九世紀」、コラム「パラダイム」「システム」「ダブルバインド」を担当。
4. 「後期フィヒテの『現象論』について」『フィヒテ研究』第12号，日本フィヒテ協会発行，pp. 4-12, 2004年12月。
5. 「ベルリン期における知識学への準備講義」報告、『フィヒテ研究』21号、21013年11月、pp. 21-24。

【辞書】

1. 『ヘーゲル事典』加藤尚武他編、弘文堂刊、1992年２月所収。
   「認識」「無限」「無限判断」「範疇」の項目執筆。
2. 『哲学基本辞典』里見軍之、飛田就一編、富士書店刊、1992年４月所収。
   約50項目執筆。
3. 『政治学事典』、弘文堂刊、2000年10月所収。
   「フィヒテ」「知識学」の項目執筆。
4. 『現代倫理学事典』、弘文堂刊、2006年12月発行。
   「オースティン」（p.97）「言語行為論」（pp. 246-47）「批判」（pp. 712-13）の項目執筆。

【翻訳】

1. V・クラフト著『ウィーン学団』（共訳）、富士書房刊、1990年９月。
2. チョー・カー・キョング著『意識と自然』（共訳）、法政大学出版局刊、1994年９月。
3. ラタン・ガズメル著「ブータン難民の過去・現在・未来」、大阪大学21世紀COEプログラム、インターフェイスの人文学、文学研究科・人間科学研究・言語文化研究科、2002・2003年度報告書「臨床と対話　マネジできないもののマネジメント」pp. 60-66、2003年12月。

4. ヌエル・ベルナップ、『問答の論理学』、2014年12月完成（未刊行）。
5. ホーリジ『真理』入江幸男、原田淳平共訳、勁草書房、2016年５月。

【座談会】

1. 「理論はボランティア活動の何を語ってこなかったのか」、『ボランティア活動研究』第11号、大阪ボランティア協会発行、2002年９月所収。
2. 「フィヒテのアクチュアリティ」（木村博、岡田勝明、入江幸男の座談会）、木村博編『フィヒテ　―『全知識学の基礎』と政治的なもの ―』創風社、2010年８月、pp. 267-300。

【その他】

1. 「社会問題と物語」、大阪大学COEプログラム「インターフェイスの人文学」ニューズレター『Interface Humanities』02、pp. 10-15、2003年８月。
2. 「21世紀の文明が直面する哲学的な問題」、『阪大NEWS LETTER』No. 48, 2010年６月, p. 20。

【学会･研究会発表】

1. 「ヘーゲル『精神現象学』における無限判断とエレメント」、関西哲学会第33回大会にて発表、1980年10月。
2. 「フィヒテとヘーゲルの他者承認論」、日本哲学会第43回大会にて発表、1984年５月。
3. 「『新しい方法による知識学』の他者論」、日本フィヒテ協会創立総会にて発表、1985年11月。
4. 「フィヒテの他者論における第二の転回」、大阪カント・アーベント第十一回例会にて発表、1987年12月。
5. 「フィヒテの他者論とダブルバインド」、京都ヘーゲル読書会にて発表、1988年４月。
6. 「フィヒテにおける自我の複数性と道徳的世界」、日本フィヒテ協会第５回大会シンポジウムにて発表、1989年12月。
7. 「フィヒテにおける『浸透』概念」、ドイツ観念論研究会にて発表、1991年４月。
8. 「発語内的否定と質問」、京都科学哲学コロキアム第156回例会にて発表、1991年12月。
9. 「問いと物語」、第３回解釈学シンポジウムにて発表、1995年３月。
10. 「ボランティアと公共性」、第２回ボランティア学研究会にて発表、1998年９月。
11. 「ボランティアと公共性」、国際ボランティア学会設立総会にて発表、1999月３月。

12a. 「承認論の可能性」、ヘーゲル研究会シンポジウムにて発表、1999年12月。

12b. 「ヘーゲル承認論の可能性―相互知識と相互承認―」社会哲学研究会にて発表、2000年

７月（これは、12aの発表内容とは全く別のものである）。

13. ‘Models and Illocutionary Acts’、IA 02 International Symposium にて発表、2002年10月。
14. 「いかにして相互知識は可能か」関西哲学会大会、依頼発表、2003年10月。
15. 「ボランティアから見た社会問題と公共性」、国立民族学博物館「運動の現場における知の再編」研究会にて発表、2004年９月18日。
16. „Der transzendentale Beweis der Sittlichkeit bei Fichte“, in Kolloquium „Japanische Fichte-Forschung heute“, Philosophie-Department der Ludwig-Maximilians-Universität München, Juli 2005.
17. “Eine Aporie der Fichteschen Wissenschaftslehre ---- Einige Schwierigkeiten mit der intellektuellen Anschauung ---„ in Internationaler Fichte-Kongress an der Universität Halle von 4.-7. Oktober 2006.
18. 「フィヒテ哲学の全体像を求めて」日本ディルタイ協会 2007年 関西研究大会、関西大学　2007年６月。
19. “Contradiction in the Question- Answer Relation” in The 13th International Congress of Logic Methodology and Philosophy of Science, Tsinghua University, Beijing, China, August 9-15, 2007.
20. 「「意識の事実」における諸自我と共同自我」日本フィヒテ協会第23回大会、会長特別講演、大阪大学、2007年11月17日。
21. “‘Our’ Practical Knowledge” in The XXII World congress of Philosophy, Seoul National University, Seoul, Korea, July 30.- August 5., 2008.
22. 「内在的基礎付け主義とドイツ観念論」日本ヘーゲル学会シンポジウム「ドイツ観念論とポスト分析哲学」での発表、（東北大学、2009年６月13日）。
23. “Die Möglichkeit des kollektiven Wissens bei Fichte”in The VII International Fichte Kongress, The Royal Academie, Brussel, Oct 6. - 9., 2009-10-22.
24. 「フィヒテのスピノザ批判」大阪大学文学部共同研究「ドイツ思想史における虚軸としてのスピノザ」研究会にて発表、2010年１月30日、大阪大学待兼山会館。
25. “Was ist eine moralische Frage? -- Ein „dichtes“ moralisches Wort und die Würde des Menschen --“, Internationale Tagung “Würde und Werte”, am 14. Sep. 2010, Nanzan Universität.
26. „How Is It Possible to Imitate Unconsciously a Desire of Another Person?“, 第二回 IMITATIO、2010年12月18日、国際キリスト教大学。
27. ‘Philosophy in Japan after WWII’ in the Pacific Division of APA in Seattle, April 6. 2012.

28. ‘Semantic Holism and Fichte’s Wissenschaftslehre’ in The Inaugural Conference For Kant, Fichte, and The Legacy of German Idealism, on April 9, 2012, at the University of Nebraska Omaha.
29. ‘Semantic Holism and Fichte’s Wissenschaftslehre’ in The VIII International Fichte Kongress, Bologna University, Sep. 19-22., 2012.
30. 「『意識の事実』と知識学の関係 ――あるいは、アポステリオリな知とアプリオリナ知の関係」日本フィヒテ協会大会シンポジウム「ベルリン期における知識学への準備講義」で発表、2012年11月12日、神戸UNITY。
31. 「翻訳の不可能性」Heidelberg Universität、翻訳学科、2012年12月11日。
32. ‘A Proof of Collingwood’s Thesis’, in Hegel Saal, Philosophische Seminar Heidelberg University, 18. Dec. 2012.
33. „Die große Veränderung der Geisteswissenschaften und Sozialwissenschaften in Japan nach 1990“, (1990年以後の日本における人文社会科学の変化), Institut für Japanologie Universität Heidelberg, 12. 2012.
34. 「徹底的に純粋な観念論の限界　――フィヒテが知の外部に絶対者を想定する理由――」同志社大学文学部哲学科 パネルディスカッション『フィヒテ後期知識学における絶対者と知』、同志社大学寧静館、2013年３月２日。
35. 「討議倫理学から問答論的アプローチへ向けて」久高科研研究会、琉球大学法文学部、2013年３月23日。
36. “The Self-reflectiveness of Society -- Nationalism, Idealism, and Social Constructionism --”, HeKKSaGOn Presidents’ Meeting University of Göttingen, September 13. 2013.
37. “Indeterminacy and creation in cultural comparizon”, HeKKSaGOn Presidents’ Meeting in Tohoku University, Haki Hall in Tohoku University, April 17. 2015.
38. “An Alternative Transcendental Argument”, in The Conference on Transcendental Philosophy and Metaphysics, at The Graduate School of Letters Osaka University, April 22-24, 2015,
39. ‘Thing in Itself and Being’ in IX. Kongress der International J. G. Fichte-Gesellschaft, Universidad Autonoma de Madrid, September 8-11, 2015.
40. ‘Ethical Thoughts in modern Japan influenced by the West --- In the case of Tetsurō Watsuji and Keiichirō Hirano ----‘ Groningen University, May 3. 2016.
41. ‘Ethical Thoughts in modern Japan influenced by the West --- In the case of Tetsurō Watsuji and Keiichirō Hirano ----‘ Goettingen University, May 12. 2016.

42. 'Are deictic and anaphoric uses distinguishable?', in Chulalongkorn University－Osaka University International Joint Conference, Frontiers of Philosophical Investigation in Asia, at Chulalongkorn University, July 17. 2016.
43. 'Meaning as Role in Question-Answer-Inferences: Beyond Robert Brandom's inferential semantics', Sogang University (Korea), May 23, 2018.
44. 'Question-Answer Inference', XXIV Word Congress of Philosophy, in Beijing, August 17. 2018.

【一般講演会】

1. 「哲学に触れてみる」大阪府立岸和田高校（1, 2年生対象）、2009年８月26日。
2. 「『攻殻機動隊』の自我論」、「世界哲学の日」記念ワークショップと講演会、大阪大学哲学思想文化学専修主催、2014年11月４日。

【研究助成】

1. 財団法人大川情報通信基金研究助成　2004年11月～2005年10月
   研究テーマ「コミュニケーションにおける相互知識の分析とその応用」
2. 文部科学省「先端的教育研究海外支援プログラム」
   研究テーマ「フィヒテ研究の国際的連携の構築」2004年３月～2005年12月
3. 文部科学省「科学研究費補助金」基盤研究（C）
   課題番号19520021「分析哲学とフィヒテ哲学」2007～９年度
4. 文部科学省「科学研究費補助金」基盤研究（C）
   課題番号2520023「意味の全体論とドイツ観念論」2010～2012年度
5. 文部科学省「科学研究費補助金」基盤研究（C）
   課題番号：25370018「分析哲学とドイツ観念論の連携およびそのグローバルな意義」2013～2015年度
6. 文部科学省「科学研究費補助金」基盤研究（C）
   課題番号：16K02123「心の哲学に対するドイツ観念論からの貢献」2016～2018年度

榎本文雄教授　略歴・研究業績

■略歴

1954年２月　和歌山市で出生

【学歴】

1969年３月　和歌山市立日進中学校 卒業
1972年３月　和歌山県立桐蔭高等学校 卒業
1976年３月　京都大学文学部哲学科仏教学専攻 卒業
1978年３月　京都大学大学院文学研究科博士前期課程 宗教学（仏教学）専攻 修了 文学修士
1981年３月　京都大学大学院文学研究科博士後期課程 宗教学（仏教学）専攻 指導認定退学
2000年１月　京都大学文学研究科 博士（文学）

【職歴】

1981年４月　日本学術振興会奨励研究員（京都大学文学部）（～1982年３月）
1982年４月　京都大学文学部助手（～1984年３月）
1984年４月　華頂短期大学専任講師（～1991年３月）
1991年４月　華頂短期大学助教授（～1996年３月）
1996年４月　大阪大学文学部助教授（～1999年７月）
1999年８月　大阪大学大学院文学研究科教授（～2019年３月（予定））

1979年10月　種智院大学非常勤講師（～1986年３月）
1984年４月　京都大学文学部非常勤講師（1986年３月）
1986年５月　アレクサンダー・フォン・フンボルト財団研究員（ゲッティンゲン大学）（～1987年３月）
1988年４月　京都大学文学部非常勤講師（～1997年３月）
1988年４月　広島大学文学部非常勤講師（～1988年９月）
1989年４月　大阪大学文学部非常勤講師（～1989年９月）
1991年10月　東京大学文学部非常勤講師（～1992年３月）
1992年４月　和歌山大学教育学部非常勤講師（～1992年９月）

1994年10月　大阪大学文学部非常勤講師（～1995年９月）
1995年４月　京都大学人文科学研究所非常勤講師（～2003年３月）
2000年４月　関西大学文学部非常勤講師（～2001年３月）
2005年10月　東北大学文学部非常勤講師（～2006年３月）
2013年10月　東京大学文学部非常勤講師（～2014年３月）

【学会役員】

1996年４月　日本印度学仏教学会理事（～現在）
1996年４月　日本佛教学会理事（～現在）
1999年４月　パーリ学仏教文化学会理事（～現在）
2003年４月　インド思想史学会理事（～現在）
2003年11月　佛教史学会評議員（～現在）
2005年10月　日本チベット学会委員（～現在）
2011年９月　東方学会学術委員（～現在）

■研究業績一覧

A 著書

A1：『ブッダの詩Ⅰ』（『原始仏典』７），講談社，1986年（第３章「大いなる章」，pp. 178-273, 418-423 担当）.

A2：『インド仏教Ⅰ』（『岩波講座・東洋思想』８），岩波書店，1988年
（II,2「初期仏教思想の形成――北伝阿含の成立」，pp. 99-116 担当）.

A3：*Sanskrit-Texte aus dem buddhistischen Kanon: Neuentdeckungen und Neueditionen*, 1 (Sanskrit-Wörterbuch der buddhistischen Texte aus den Turfan-Funden, Beiheft 2), Göttingen 1989 (“Sanskrit Fragments from the Saṃyuktāgama Discovered in Bamiyan and Eastern Turkestan,” pp. 7-16; “Śarīrārthagāthā: A Collection of Canonical Verses in the Yogācārabhūmi, Part 1: Text,” pp. 17-35 担当).

A4：*A Comprehensive Study of the Chinese Saṃyuktāgama: Indic Texts Corresponding to the Chinese Saṃyuktāgama as Found in the Sarvāstivāda-Mūlasarvāstivāda Literature*, Part 1: *Saṃgītanipāta, Kyoto 1994 (科学研究費報告書).

A5：*A Study of the Nīlamata: Aspects of Hinduismin Ancient Kashmir,* Kyoto 1994 (“A Note on Kashmir as Referred to in Chinese Literature: Ji-bin,” pp. 357-365 担当).

A6：*Sanskrit-Texte aus dem buddhistischen Kanon: Neuentdeckungen und Neueditionen*, 3 (Sanskrit Wörterbuch der buddhistischen Texte aus den Turfan-Funden, Beiheft

6), Göttingen 1996 (“A Sanskrit Fragment from the Vibhāṣā Discovered in Eastern Turkestan,” pp. 133–143 担当).

A7：『岩波哲学・思想事典』，岩波書店，1998年（「阿含経」，pp. 14f.;「原始仏教」，pp. 456f.;「五蘊」，pp. 508f.;「ゴータマ・ブッダ」，pp. 528–530;「サンスカーラ」，pp. 590f.;「四諦」，pp. 654f. 担当）.

A8：『NHK スペシャル・ブッダ 大いなる旅路 1 ：輪廻する大地・仏教誕生』，日本放送出版協会，1998年（「最古の仏典――年代が特定できる現存最古の仏教写本」，pp. 63–68 担当）.

A9：牧田諦亮（監）・落合俊典（編）『中國日本撰述經典（其之四）・漢譯經典』（七寺古逸經典研究叢書 第四巻），大東出版社，1999年（「度梵志經」,「本行六波羅蜜經」，pp. 531–554 担当）.

A10：『『雑阿含経』の文献学的研究』，学位論文（京都大学），2000年.

A11：『真理の偈と物語――『法句譬喩経』現代語訳』上下，大蔵出版，2001年（共著）.

A12：奈良康明，下田正弘（共編）『仏教の形成と展開』（『新アジア仏教史02：インドⅡ』），佼成出版社，2010年（「ジャイナ教と仏教」，pp. 116–118, 438f. 担当）.

A13：井上ウィマラ，葛西賢太，加藤博己（共編）『仏教心理学キーワード事典』，春秋社，2012年（「漏」，p. 50 担当）.

A14：尾崎雄二郎，竺沙雅章，戸川芳郎（共編）『中国文化史大事典』，大修館書店，2013年（「阿含経」，p. 4;「求那跋陀羅」，p. 274 担当）.

A15：『不殺生（アヒンサー）の動機・理由――インド仏教文献を主資料として――』（RINDAS 伝統思想シリーズ 14），龍谷大学現代インド研究センター（RINDAS），2013年.
（http://www.let.osaka-u.ac.jp/indology/Enomoto_ronbun/rindas14.pdf）

A16：『ブッダゴーサの著作に至るパーリ文献の五位七十五法対応語 ― 仏教用語の現代基準訳語集および定義的用例集 ― バウッダコー シャⅢ』，山喜房佛書林，2014年（編著代表）.

A17：『スッタニパータ［釈尊のことば］全現代語訳』（『講談社学術文庫 2289），講談社，2015年（第 3 章「大いなる章」，pp. 106–202, 319–322 担当）.

A18：『上座仏教事典』，めこん，2016年（「四諦」pp. 64f.,「涅槃」pp. 372f. 担当）.

B 学会誌・論文集掲載論文

B1：「āsrava について」『印度學佛教學研究』27巻 1 号，1978年，pp. 158f.
（https://www.jstage.jst.go.jp/article/ibk1952/27/ 1 /27_ 1 _158/_article/-char/ja/）

B2：「āsrava（漏）の成立について――主にジャイナ古層経典における――」『佛教史學研究』22巻1号，1979年，pp. 17–42.

B3：「Udānavarga 諸本と雑阿含経，別訳雑阿含経，中阿含経の部派帰属」『印度學佛教學研究』28巻2号，1980年，pp. 931–933.
（https://www.jstage.jst.go.jp/article/ibk1952/28/2/28_2_933/_article/-char/ja/）

B4：「仏教における三明（tisso vijjā）の成立」『印度學佛教學研究』29巻2号，1981年，pp. 936–939.
（https://www.jstage.jst.go.jp/article/ibk1952/29/2/29_2_939/_article/-char/ja/）

B5：「『摂大乗論』無性釈に引用される若干の経文をめぐって――『城邑経』の展開を中心に――」『佛教史學研究』24巻2号，1982年，pp. 44–57.

B6：「雑阿含1299経と1329経をめぐって―― Gāndhārī Dharmapada 343–344とTurfan出土梵文写本No.50の同定とMahābhārata13.132の成立――」『印度學佛教學研究』30巻2号，1982年，pp. 957–963.
（https://www.jstage.jst.go.jp/article/ibk1952/30/2/30_2_963/_article/-char/ja/）

B7：「初期仏典における三明の展開」『佛教研究』12, 1982年，pp. 63–81.

B8：「『雑阿含』*DevatāsaṃyuktaとDevatāsūtraの展開―― Ratnāvadānamālā第八章の成立」『印度學佛教學研究』31巻1号，1982年，pp. 396–399.
（https://www.jstage.jst.go.jp/article/ibk1952/31/1/31_1_399/_article/-char/ja/）

B9：「初期仏典における āsrava（漏）」『南都佛教』50, 1983年，pp. 17–28.

B10：“The Formation and Development of the Sarvāstivāda Scriptures,” in: *Proceedings of the 31st International Congress of Human Sciences in Asia and North Africa*, Tokyo 1984, pp. 197f.

B11：「説一切有部系アーガマの展開――『中阿含』と『雑阿含』をめぐって――」『印度學佛教學研究』32巻2号，1984年，pp. 1070–1073.
（https://www.jstage.jst.go.jp/article/ibk1952/32/2/32_2_1073/_article/-char/ja/）

B12：「阿含経典の成立」『東洋学術研究』23巻1号，1984年，pp. 93–108.

B13：「東トルキスタン出土梵文阿含の系譜」『華頂短期大学研究紀要』29, 1984年，pp. 11–26.

B14：「初期仏典と論書の伝承史研究にむけて」『佛教論叢』29，1985年，pp. 134–137.

B15：「『雑阿含経』関係の梵文写本断片――『Turfan 出土梵文写本目録』第5巻をめぐって」『佛教研究』15, 1985年，pp. 81–93.

B16：“On the Formation of the Original Texts of the Chinese Āgamas,” *Buddhist Studies Review*, Vol. 3, No. 1 (London, 1986), pp. 19–30.

B17：「Abhidharmadīpa のトルファン出土梵文写本断片」『印度學佛教學研究』37巻 1 号，1988年，pp. 414–420.
（https://www.jstage.jst.go.jp/article/ibk1952/37/ 1 /37_ 1 _420/_article/–char/ja/）

B18：「初期仏教における業の消滅」『日本佛教學會年報』54, 1989年，pp. 1–13（＝『仏道の体系』，平楽寺書店，1989年，pp. 1–13）.

B19：“On the Annihilation of *karman* in Early Buddhism,” *Transactions of the International Conference of Orientalists in Japan*, 34 (Tokyo, 1989), pp. 43–55.

B20：「罽賓――インド仏教の一中心地の所在」『塚本啓祥教授還暦記念論文集：知の邂逅――仏教と科学』，佼正出版社，1993年，pp. 259–269.

B21：「『尊婆須蜜菩薩所集論』所引の阿含の偈をめぐって―― tathāgataの原意を中心に――」『渡邊文麿博士追悼記念論集：原始仏教と大乗仏教』上巻，永田文昌堂，1993年，pp. 255–269.

B22：「『婆沙論』の梵文写本断片」『印度學仏教學研究』42巻 1 号，1993年，pp. 490–495.
（https://www.jstage.jst.go.jp/article/ibk1952/42/ 1 /42_ 1 _495/_article/–char/ja/）

B23：「『法句譬喩経』の成立について――『中本起経』の成立にからんで――」『季刊アーガマ』130, 1994年，pp. 284–286.

B24：「罪業の消滅と prāyaścitta」『待兼山論叢』30（哲学篇），1996年，pp. 1–12.
（http://ir.library.osaka–u.ac.jp/dspace/handle/11094/9028）

B25：“Sanskrit Fragments from the *Saṃgītanipāta of the *Saṃyuktāgama*,” in: P. Kieffer–Pülz and J.–U. Hartmann (eds.), *Bauddhavidyāsudhākaraḥ: Studies in Honour of Heinz Bechert on the Occasion of His 65th Birthday* (Indica et Tibetica, 30), Swisttal–Odendorf (Germany) 1997, pp. 91–106.

B26：「「根本説一切有部」と「説一切有部」」『印度學仏教學研究』47巻 1 号，1998年，pp. 392–400.
（https://www.jstage.jst.go.jp/article/ibk1952/47/ 1 /47_ 1 _400/_article/–char/ja/）

B27：“The Discovery of ‘the Oldest Buddhist Manuscripts’,” *The Eastern Buddhists*, Vol. 32, No. 1 (2000), pp. 157–166.

B28：“‘Mūlasarvāstivādin’ and ‘Sarvāstivādin’,” in: Christine Chojnacki, Jens–Uwe Hartmann and Volker M. Tschannerl (eds.), *Vividharatnakaraṇḍaka: Festgabe für Adelheid Mette* (Indica et Tibetica, 37), Swisttal–Odendorf 2000, pp. 239–250.

B29：「なぜ殺してはいけないか？――インド古典における自然概念と不殺生の根拠をめぐって――」，里見軍之（編）『自然のなかの人間』，大阪大学大学院文学研究科，2001年，pp. 71–81.

B30：「『雑阿含経』の訳出と原典の由来」『仏教文化の基調と展開：石上善應教授古稀記念論文集』１，山喜房佛書林，2001年，pp. 31–41.

B31：石井公成・榎本文雄「シンポジウム「インド学仏教学におけるコンピューター利用の現状と展望」」『印度學仏教學研究』50巻２号，2002年，pp. 755–759.（https://www.jstage.jst.go.jp/article/ibk1952/50/2/50_2_759/_article/-char/ja/）

B32：「ヘルンレ写本中の『雑阿含』断片をめぐって――『雑阿含経』，世親，『倶舎論』真諦訳の位置――」『櫻部建博士喜寿記念論集：初期仏教からアビダルマへ』，平楽寺書店，2002年，pp. 139–153.

B33：「現存最古の仏教写本――大英図書館のカローシュティー樺皮巻物――」『佛教大学総合研究所報』22, 2002年，pp. 26–29.

B34：“The Extinction of *Karman* and *Prāyaścitta*,” in: *Buddhist and Indian Studies in Honour of Professor Sodo Mori*, Hamamatsu 2002, pp. 235–246.

B35：「「根本説一切有部」の登場」『神子上恵生教授頌寿記念論集：インド哲学佛教思想論集』，永田文昌堂，2004年，pp. 651–677.

B36：「仏教研究における漢訳仏典の有用性――『雑阿含経』を中心に――」『中國宗教文獻研究國際シンポジウム報告書』，京都大学人文科学研究所，2004年，pp. 37–55.（http://www.let.osaka-u.ac.jp/indology/Enomoto_ronbun/kanyaku_yuyousei.pdf）

B37：「nibbuta / nivvuḍaについて」『長崎法潤博士古稀記念論集：仏教とジャイナ教』，平楽寺書店，2005年，pp. 553–560.

B38：「佛教研究における漢譯佛典の有用性――『雜阿含經』を中心に――」『中國宗教文獻研究』，臨川書店，2007年，pp. 59–82.

B39：“Research Trend on Funerals and Tombs in Indian Buddhism,” in: Atsushi Egawa (ed.), *Comparative History of the Civilizations Concerning Funerals and Commemoration of the Dead: Relatives, Neighboring Societies and States*, Osaka 2007, pp. 192–203（科学研究費報告書）.

B40：「インド仏教における葬儀と墳墓に関する研究動向」，江川溫（編）『死者の葬送と記念に関する比較文明史――親族・近隣社会・国家――』，大阪大学，2007年，pp. 160–169（科学研究費報告書）.

B41：「輪廻思想と初期仏教」『インド世界への憧れ～仏教文化の原郷を求めて～』（シルクロード・奈良国際シンポジウム，９），なら・シルクロード博記念国際交流財団，2008年，pp. 5–13.

B42：「生老病死」『那賀医師会報』350, 2008年，pp. 5–7.

B43：“Fundamental Terms of Early Buddhism: Problems in Translation,” *Transactions of*

the International Conference of Eastern Studies, 53 (Tokyo, 2008), pp. 98f.

B44：「「四聖諦」の原意とインド仏教における「聖」」『印度哲学仏教学』24，2009年，pp. 336–354.

B45：「初期仏教における涅槃――無我説と関連して――」『佛教研究』40, 2012年，pp. 149–160.

B46：「devarājaについて」，肥塚隆（編）『南アジアおよび東南アジアにおけるデーヴァラージャ信仰とその造形に関する基礎的研究』，大阪大学，2013年，pp. 7–11（科学研究費報告書）.

B47：“Some Questions Concerning the Translation of Early Indian Buddhist Texts into Modern Japanese,” *Transactions of the International Conference of Eastern Studies*, 59 (Tokyo, 2014), pp. 76–78.

C その他

C1： 原典校訂出版分担：*Sanskrithandschriften aus den Turfanfunden*, 6 (Verzeichnis der orientalischen Handschriften in Deutschland, X,6), ed. K. Wille and H. Bechert, Stuttgart 1989, pp. 19–36, 114–117, 173, 198–200, 215–217.

C2： 原典校訂出版分担：*Sanskrithandschriften aus den Turfanfunden*, 7 (Verzeichnis der orientalischen Handschriften in Deutschland, X,7), ed. K. Wille and H. Bechert, Stuttgart 1995, pp. 58f., 72f.

C3： 訳注分担：桑山正進（編）『慧超往五天竺國傳研究』，京都大学人文科学研究所，1992年，pp. 56, 62, 86f.

C4： 書評: *Sanskrit-Wörterbuch der buddhistischen Texte aus den Turfan-Funden und der kanonischen Literatur der Sarvāstivāda-Schule (Sanskrit Dictionary of the Buddhist Texts from the Turfan Finds and of the Canonical Literature of the Sarvāstivāda School)*, Band 1: Vokale, begonnen von Ernst Waldschmidt, herausgegeben von Heinz Bechert, bearbeitet von Georg von Simson, Michael Schmidt, Jens-Uwe Hartmann und Siglinde Dietz, Göttingen 1994, in: *Oriens*, 35 (Leiden, 1996), pp. 314–317.

C5： 討論司会コメント：「第II部「戒律と儀礼」コメント・討論」『仏教の歴史的・地域的展開――仏教史学会五十周年記念論集――』法藏館，2003年，pp. 249–280.

C6： 口頭発表報告：「初期経典の視点から」（日本南アジア学会第18回全国大会小パネル「縁起解釈の再評価」）『南アジア研究』，18，2006年，pp. 244f.
（https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjasas1989/2006/18/2006_18_244/_pdf/-char/ja）

C7： パネリスト：「仏教の誕生と現代」『インド世界への憧れ～仏教文化の原郷を求めて

～』（シルクロード・奈良国際シンポジウム，9），なら・シルクロード博記念国際交流財団，2008年，pp. 142–155.

C8　編集：『パーリ学仏教文化学 26：前田惠學先生追悼論集』，パーリ学仏教文化学会，2012年.

C9：セッションコメント：「セッション No. 1 の発表に対するコメント」『日本佛教學會年報』78, 2013年，pp. 215–220（＝『信仰とは何か（一）――仏弟子ということ――』，平楽寺書店，2013年，pp. 215–220）.
（http://nbra.jp/publications/78/pdf/78_c–1 _01.pdf）

C10：口頭発表報告：「初期仏典の形成と異宗教との共存」（「文字化された宗教教典の形成とその意味――多文化共生を図るツールを考える」第 2 回研究会発表），『東洋大学国際哲学研究センターニューズレター』9, 2015年，p. 9.
（http://www.toyo.ac.jp/uploaded/attachment/15740.pdf）

C11：セッションコメント：「セッション No. 3 の発表に対するコメント」『日本佛教學會年報』81，2016年，pp. 254–256（＝『仏教における実践を問う（二）――社会的実践の歴史と展望――』，法藏館，2017年，pp. 254–256）.

C12：口頭発表報告：「初期仏教文献におけるprapañca（/ papañca）」（日本印度学仏教学会第66回学術大会パネル発表報告「煩悩の根源をめぐって―― vikalpa（分別）と prapañca（戯論）――」），『印度學佛教學研究』64巻 2 号，2016年，p. 765.
（https://www.jstage.jst.go.jp/article/ibk/64/ 2 /64_KJ00010250901/_article/–char/ja/）

C13：寸言：「研究の視点」『待兼山論叢』（哲学篇）30, 1996年, p. 43; 31, 1997年, p. 32; 32, 1998年, p. 72; 33, 1999年, p. 73; 34, 2000年, pp. 47f.; 35, 2001年, p. 82; 36, 2002年, p. 56; 37, 2003年, p. 50; 38, 2004年, p. 85; 39, 2005年, p. 55; 40, 2006年, p. 58; 41, 2007年, p. 39; 42, 2008年, p. 40; 43, 2009年, p. 42; 44, 2010年, p. 59; 45, 2011年, p. 24; 46, 2012年, p. 45; 47, 2013年, p. 28; 48, 2014年, p. 92; 49, 2015年, p. 74; 50, 2016年, pp. 134f.; 51, 2017年, p. 102; 52, 2018年, p. 121.

清水康次教授　履歴・研究業績

■履歴

1954年３月１日　奈良県奈良市に生まれる
1972年３月　奈良県立奈良高等学校卒業
1977年３月　京都大学文学部文学科国語学国文学専攻　卒業
1979年３月　京都大学大学院文学研究科国語学国文学専攻修士課程　修了
1979年４月　大阪女子大学学芸学部国文学科　助手
1984年６月　大阪女子大学学芸学部国文学科　専任講師
1988年４月　大阪女子大学学芸学部国文学科　助教授
1992年４月　光華女子大学文学部日本文学科　助教授
1995年４月　光華女子大学文学部日本文学科　教授
（後に京都光華女子大学日本語日本文学科と改称）
2009年10月　大阪大学大学院文学研究科　教授
1995年７月24日　博士（文学）（京都大学）取得

■研究業績［年代順、特に注記のないものは単著］

1. 「「羅生門」試論」，大阪女子大学『女子大文学　国文篇』31号，1980.3, pp. 1-23
2. 「「鼻」・「芋粥」論―「解釈」という方法にふれて―」，『国語国文』49巻10号，1980.10, pp. 46-64
3. 「「偸盗」論―風景からの仮説―」，『女子大文学　国文篇』32号，1981.3, pp. 20-46
4. 「『将軍』―問題点の所在について―」，『信州白樺』47・48合併号，1982.2, pp. 158-172
5. 「「羅生門」への過程―岩森亀一氏所蔵資料を用いて―」，『国語国文』51巻９号，1982.9, pp. 40-58
6. 「「地獄変」の方法と意味―語りの構造―」，『日本近代文学』30集，1983.10, pp. 68-81
7. 「芥川龍之介の方法―物語と作者―」，『女子大文学　国文篇』35号，1984.3, pp. 78-101
8. 「『戯作三昧』と『奉教人の死』―願望と現実の背反―」，『女子大文学　国文篇』36号，1985.3, pp. 91-110
9. 「芥川龍之介　晩年の位置をめぐって」，山崎国紀編『自殺者の近代文学』，世界思想社，1986.12, pp. 87-112
10. 「近代文学初出復刻　５」『芥川龍之介集　第２巻』，森本修・清水康次編，和泉書院，1987.10

11.「『和解』の構成」,『女子大文学　国文篇』39号，1988.3, pp. 48-62
12.「手巾」「戯作三昧」「地獄変」,『国文学』33巻 6 号，学燈社，1988.5, pp. 80-85
13.「「野性」の系譜―芥川龍之介一面―」,『国語国文』58巻 2 号，1989.2, pp. 1-16
14.「群像を描く―芥川龍之介の方法（その二）―」,『女子大文学　国文篇』40号，1989.3, pp. 95-107
15.『大阪女子大学図書館蔵　漱石単行本解説』，清水康次・青田寿美・澤美香代・西川祐代共著，大阪女子大学院生の会『百舌鳥国文』10号，1990.5, pp1-75
16.「大阪の紹介④　情報化社会の夜明け―明治大正の新聞と報道―」，財団法人都市計画協会『新都市』44巻 8 号，1990.8, pp. 182-184
17.「『藪の中』」，海老井英次ほか編『作品論　芥川龍之介』，双文社出版，1990.12, pp225-242
18.「『三四郎』の群像―視線のアポリア―」,『国語国文』61巻 2 号，1992.2, pp. 1-16
19.「「歯車」論―コンテキストを失った言葉―」,『国文学』37巻 2 号，学燈社，1992.2, pp. 102-107
20.『漱石単行本書誌・粗稿』，私家版，1992.3, pp. 1-94
21.「大阪女子大学図書館蔵　吉永文庫目録」,『女子大文学　国文篇』43号，1992.5, pp. 82-97
22.「新収資料紹介　夏目漱石『草合』初版本」,『館報池田文庫』 2 号，1992.10, pp18-20
23.「『舞姫』私論―太田豊太郎の可能性―」,『光華日本文学』 1 号，1993.1, pp53-71
24.「夏目漱石の描く恋愛―変わらぬ視線と揺れ動く視線―」，小泉道・三村晃功編『女と愛と文学　日本文学の中の女性像』，世界思想社，1993.1, pp. 187-211
25.『芥川文学の方法と世界』，和泉書院，1994.4, pp. 1-328 （博士学位論文）
26.「『高瀬舟』の視界」,『森鷗外研究』 6 号，和泉書院，1995.8, pp. 181-196
27.「芥川文学のことば―初期作品の語彙を中心に―」,『光華日本文学』 3 号，1995.8, pp. 165-181
28.「注解」,『芥川龍之介全集　第 1 巻』，岩波書店，1995.11, pp. 285-365
29.「芥川龍之介書目」,『光華女子大学研究紀要』34集，1996.12, pp. 89-155
30.「恋愛の論理―夏目漱石の『それから』―」，光華女子大学日本文学科編『恋のかたち日本文学の恋愛像』，和泉書院，1996.12, pp169-196
31.「芥川龍之介『少年』論」，奈良女子大学『叙説』24号，1997.3, pp. 114-128
32.「『白樺』―西洋美術の紹介に着目して―」,『館報池田文庫』10号，1997.4, pp. 6- 8
33.「芥川龍之介と太宰治―『雛』の語りと『哀蚊』の語り―」，山内祥史編『太宰治研究』4 輯，和泉書院，1997.6, pp. 243-255

34.「単行本書誌」,『漱石全集』第27巻，岩波書店，1997.12, pp. 457-591
35.「重版が映し出すもの」,『漱石全集月報』28号，岩波書店，1997.12, pp. 13-16
36.「芥川龍之介作品論集成」第４巻『舞踏会　開化期・現代物の世界』，編著，翰林書房，1999.6,「解説」pp. 235-256
37.「『老年』―過去への叙情と過去の位置づけ―」,『解釈と鑑賞』64巻11号，至文堂，1999.11, pp. 27-30
38.「大学図書館特別展示・学術資料講演会　明治大正の文学者たち」，関西学院大学図書館報『時計台』69号，2000.4, pp. 3-12
39.「漱石「単行本書誌」覚書」，玉井敬之編『漱石から漱石へ』，翰林書房，2000.5, pp. 232-247
40.「『暗夜行路』のモチーフについて」,『志賀直哉全集月報』17号，岩波書店，2000.8, p3- 6
41.「『暗夜行路』「第一」を読む―「結論」への疑い・「答へる事の限界」―」,『光華女子大学研究紀要』38集，2000.12, pp. 71-92
42.「『白樺』派の作家と西洋絵画―画家の自我から文学者の自我へ―」，光華女子大学日本語日本文学科編『日本文学と美術』，和泉書院，2001.3, pp. 199-220
43.「天理図書館蔵「『吾輩ハ猫デアル』印税受取書」，天理図書館『ビブリア』115号，2001.5, pp. 6-15
44.「「春の盗賊」論―多元的な物語世界―」,『太宰治研究』９輯，和泉書院，2001.6, pp. 68-84
45.「『暗夜行路』「第二」を読む―直面の時・発見の時―」,『光華女子大学研究紀要』39集，2001.12, pp. 57-78
46.「『暗夜行路』「第三」を読む―あやうさを潜めた好転―」,『京都光華女子大学研究紀要』40集，2002.12, pp. 119-142
47.「『暗夜行路』「第四」を読む―心という不合理なシステム―」,『国語国文』72巻３号，2003.3, pp. 890-910
48.「作家以前・作家としての出発の時期」，山内祥史他編『二十世紀旗手・太宰治―その恍惚と不安と―』，和泉書院，2005.3, pp. 73-92
49.「志賀直哉と京都」，京都光華女子大学日本語日本文学科編『京都と文学』，和泉書院，2005（平成17）. 3, 141-174
50.「『藪の中』と芥川龍之介の文学―語ることと意味づけること―」，京都府立私立中学高等学校国語科研究会編『国語教育雑誌』29・30合併号，2005.4, pp. 1-13
51.「代助の〈まどろみ〉と〈覚醒〉―『それから』に描かれる心―」,『光華日本文学』13号，

2005.10, pp. 31-50
52.「「アテネ文庫」の研究（その１）」,『京都光華女子大学研究紀要』44集，2006.1. pp. 1-45
53.「「アテネ文庫」の研究（その２）・各点調査Ⅰ」,『京都光華女子大学研究紀要』45集, 2007.1, pp. 1-37
54.「昭和前期の文学界における〈通俗性〉の問題―「宝塚文芸図書館」から見た〈読者〉―」,『京都光華女子大学研究紀要』46集，2008.1, pp. 1-38
55.「谷崎潤一郎における自己解放の過程」，京都光華女子大学日本語日本文学科編・発行『谷崎潤一郎と京都』，2009.3, pp. 9-58
56. 日新電機「石村亭」（旧「後の潺湲亭」）訪問記」，清水康次・斎藤美紗・武田美穂共著，京都光華女子大学日本語日本文学科編・発行『谷崎潤一郎と京都』，2009.3, pp. 136-151
57.「「こゝろ」における「不可思議な私」―くいちがう〈心〉と〈私〉―」,『光華日本文学』17号，2009.10, pp. 17-46
58.「下人の物語の始まりと終わり―芥川龍之介「羅生門」」,『解釈と鑑賞』75巻９号, 2010.9, pp. 64-72
59.「〈文学環境〉の視点から見た『白樺』―『白樺』の研究・序章―」,『待兼山論叢　文化動態論篇』44号，2010.12, pp. 1-25
60.「与謝野晶子「明るみへ」論―古い「私」からの解放―」,『叙説』38巻，2011.3, pp. 14-29
61.「『白樺』に先行する芸術運動―『明星』『スバル』『方寸』とその時代状況―」,『大阪大学大学院文学研究科紀要』53巻，2013.3, 47-107
62.「翻訳文学の興隆から日本の近代の文学状況を探る」,『阪大比較文学』７号，2013.3, pp. 174-177
63.「書誌学的研究の地平」,『日本近代文学』89集，2013.11, pp. 218-222
64.「「玄鶴山房」―「暗澹」たる日常の形象化―」，宮坂覺編『芥川龍之介と切支丹物―多声・交差・越境』，翰林書房，2014.4, pp. 102-114
65.「武者小路実篤「「それから」に就て」論―実篤の問題意識と漱石作品との隔たり―」,『国語国文』83巻11号，2014.11, pp. 1-16
66.「書誌学」，日本近代文学会編『ハンドブック　日本近代文学研究の方法』，ひつじ書房，2016.11, pp. 202-210
67.「『白樺』における西洋美術―初期数年間の西洋美術紹介を中心に―」『大阪大学大学院文学研究科紀要』57巻，2017.3, pp. 113-184
68.『「羅生門」の世界と芥川文学』，大阪大学出版会，2019.1, pp. 1-240